

伊豆大島巡検

吉 田 直 美

伊豆大島といえば、最近「椿とアソコの伊豆大島へようこそ」という内容の宣伝ポスターを電車の中でよく見かけるようになった。もうそろそろ、そういうシーズンなのだ。昨年は、11月——一昨年の大噴火と同じ時期に、再び三原山の火山活動が活発になった。当初は「大噴火の前兆ではないか」という見方もあったが、現在のところ、著しい変化はないらしい。このことが幸いして、

（大島巡検に参加した我々28人をも含めた）昨年の観光客数は前年を上回ったそうで、大島町役場の観光課長をはじめ、関係者はホクホク顔であったことだろう。しかし、この傾向が今後も続くとは限らないので、『御神火の伊豆大島』のPRに更に力を入れる必要がある。大島は、地理的ハンディはもちろんのこと、資金不足や若い世代の人口流出に代表される社会的ハンディをも背負っている。詳しいことはわからないのだが、レクリエーション地的性質を備えたスポーツアイランドの企画に行き詰まり、近年は『生きている地球の体験』を呼び物にキャンペーンを実施しているという観光業の現状は、島の主産業にしてはあまりにも不安定すぎるという印象を受けた。

二日間、島内では自由行動が一分も無い程のハードスケジュールであった。残暑も加えて、次から次へとバスで移動するのにうんざりしてきたが、その内容は、測候所・大島町役場・きぬさや栽培農家・つばき油製油工場・波浮港などで説明をうかがうという巡検ならではの貴重な体験であった。椿油製油工場では、てまひまかけた昔ながらの工程がとられていた。椿油は、炊め物に使う食用からシャンプーまでと用途は広い。だが、驚くことに、椿はそれ以外にも、幹は民芸品や燃料に、その灰は御神火焼のくすりに、花は切花や

生花など観賞用のほか、茶・食用に、実はアクセサリー類に、油の絞るかすは肥料や燃料にと、無駄なく利用されているのだ。

しかし、大島の歴史や自然や産業のスポットを足早に見学するだけでなく、自分の足で「大島を味わう」とでも言おうか、そういう時間の余裕をもったプランで再び訪れたいとつくづく感じたものだ。

大島の景観の特徴の一つに、家や畑を取り囲む防風林が挙げられる。年間平均風速6.5m/sという強風から作物を守るために不可欠なのだそう。また、水田が見あたらないことも特徴の一つである。濃尾平野で生まれ育った私は、無意識的に水田はどこにでもあるもの、できるものと考えていた。つまり、私は水田が——日本の場合特に、狭く山がちな国土の限られた農地を少しでも有効に使おうという人間の努力の結果であることを見失っていたのだ。日本人は主食である米を作るため、水をひき、山を開いた。しかし、大島では条件が悪すぎた。換金性の高い都市向けの花弁ときぬさやえんどうが、現在では農業の大半を占めている。

山は——三原山は静かだった。威張っているようにみえた。元町の火葬場のほんの手前まで押し寄せた溶岩流（今でもその内部は温かいそう）や、道路の両側に切り出された地層断面は、まさに自然がむきだしという感じだった。

下調べが浅かったせいもあり、豊富な内容を消化しきれず、充実した巡検とは決して言い難いのだが、大島巡検をきっかけに、離島や火山地域がかかえている諸問題を意識するようになったのは、大きな収穫であったと思う。

（9月7日～8日 式教官指導）